



## ハゲオヤジ

---

オヤジが言うにオヤジが禿げたのには理由があって、夜森を歩くのを怖がるオフクロのために髪をフクロウに変えて見守らせたという。フクロウが夜盲でないのも真後ろまで見ることが出来るのもそんな優しさによるもので、言われれば顔の縁がハート型だったりもする。僕は愛する人のために頭髪を捧げることが出来るだろうか。そんなオヤジの肌が灰色を帯びはじめ春には葉に先立って暗紅色の小花をつけるようになった。オヤジの形状は絶えず変わっていくが、今のところオヤジはオヤジの核を保っているようである。

## 手紙

---

天国の祖父に送った手紙が届かずに戻ってきた。試しに地獄に送ったら返信が返ってきた。何故地獄に移ったのか気になってまた手紙を書いた。しばらくして返信が来た。それによると特に粗相をしたわけではなく、単に地に足を着いた生活が恋しくなったそうである。天国で浮気でもして祖母に訴えられたのかと思ったのだが全く検討違いだった。祖父には天国は浮ついていて性に合わないらしい。年々祖父のように天国に疲れて地獄に移る人が増えているそうだ。近頃は地獄もホスピタリティー溢れていて、釜風呂や足つぼ山などは年中無休で利用可能らしい。手紙は、祖母も犬もみんな元気です、と簡素に締められていた。春先に死んだうちの犬の面倒を祖父祖母がみてくれていると知って安心した。次の手紙にはビーフジャーキーを入れてあげよう。

## 絵の神様

---

絵を描いていると絵の神様がにゅっと降りてきた。絵の神様だけあって絵を描きたがる。私は私の絵を描きたいのでえらく迷惑だ。絵の神様が初めてうちにでたのは去年の春のことで、一度出てからは頻繁にでるようになった。絵の描き途中にこちらの集中力が高まると舞い降りてくるようで、つまり毎度絶妙のタイミングで邪魔をされる。創作活動中に神様が舞い降りてくると喜ぶ人もいるが、私は自分のことは自分でやりたい性質だ。

我が家は長寿家系で、祖祖父と祖祖母は亀として今だに健在だ。こまめに水槽の水を替えないとすぐに匂うが、この匂いが我が家の匂いだったりする。窓辺に置かれた二匹の亀が僕の祖祖父と祖祖母だと気づいたのは自慰行為も初体験も彼らの目の前で済ませたずっと後だった。まあ彼らにしてみれば微笑ましい些細な出来事だったに違いない。

例外的に唯一短命だったのは六番目の兄で、その兄はある夏のあまりに暑い日に周囲の反対を押し切ってセミになった。甘いものを多く摂り、大きな声で鳴きつづけ、八日後に死んだ。褐色の体があまりにも軽かったのが悲しくて覚えている。騒音で近所からの苦情がひどかったが葬儀にはホソヒグラシ族が大勢参列してくれた。人生何が良いのかは本人にしかわからない。僕は今のところ何にも変化していない。

ぶあつい曇り空の上で朝日さんと夕日さんが話していた。朝日さんが一度沈んでみたいと言  
うと、夕日さんは実は前々から昇ってみたかったと言った。そして翌日にそれは実行された。二  
人とも自分の仕事ぶりには満足だった。夕日さんは人々に活力を与えたつもりだったし、朝日さ  
んはカップルのキスをいい感じに引き出したつもりだった。会社員たちを会社に送り出し、ホス  
テスたちを夜の街へとうまく運んだ。それなのに人々はどうだろう、夕日さんを朝日と呼び、朝  
日さんを夕日と呼んだ。二人は困惑した。翌日に仕事を戻すと朝日さんは朝日と、夕日さんは夕  
日と呼ばれた。二人は落胆した。50億年間休まずに働いているのに、否、それが故に、あいつら  
は朝日は沈まないと信じているし、夕日が昇らないと決めつけている。二人はめらめらと泣いた  
。

アサヤマダ先生おはようございます。ユウヤマダ先生さようなら。生徒たちは私に元気に挨拶  
をする。ヤマダ先生は何故生徒たちが自分のことをそのように呼ぶのかわからない。しかし考え  
ると少し気になることがある。私の恋人は私のことを夜に抱く。五泊六日の旅行に行ったとき  
さえ、抱かれるのはいつも夜だった。恋人は私をどう見ているのだろう。彼はユウヤマダの恋  
人で、アサヤマダは彼の恋人ではないのかしら。人は時とともに変わるとも変わらないとも言わ  
れる。しかし私の場合は時間帯である。私の何が時間に応じて変化しているのか、教師という立  
場にありながらそんなことが自分でわからない。

## 神様

---

地震で納屋が壊れたので神様の家へ苦情を言いに行った。神様は昼食の最中だったが構わず文句を言った。神様が億劫そうに神様の理屈を説明したが、私には一つもわからなかった。たとえ必要な地震があるとしても私の納屋には関係ない、私はぴしゃりと言った。仕舞には管轄がどうのこうのと言い出すものだから罵詈雑言を浴びせた。この近所の神様が言うには、彼の受け持ちは元々ささやかなものだったのに、いつからか人々が勝手に万能である、ということにしまったらしい。そして毎日誰かが責任を都合よく押し付ける、のだと。窃盗しザンゲし暴行しザンゲし、ザンゲして強盗しザンゲして殺人を行う。神様は話しながらだんだん顔を赤らめながら 怒り始めた。私は聞き飽きて神様の家をでた。そして神様が直さない納屋を燃やした。

いつから僕は動くようになったのだろう。いつから戻れなくなったのだろう。遠い太古の記憶は鮮明で、魚や虫を転々としていたあたりから記憶は随分と曖昧になる。養分を得るために動くようになり、熱いや冷たいやら外界の刺激に反応するようになり、痛いや痒いやら体を守るようになった。日をあびて雨にうたれ風にさらされる、そんなことが遥か昔のことになってしまった。進化したのだろうか。ただ流されてきたのだろうか。どんどん不便になる。豆腐をつつきながら夜のカーテンに問う。





## 足跡

---

雪の上を歩いているとじきに足跡に追い抜かれた。なんたることと憤慨していたら今度は足音にも先を行かれた。ひたひたと重なっていた音がいつの間にかずれてその辺で鳴っている。自分の足跡なのに怪しからんと、自分なりに方向を異にしようとするがどうにも自分の足跡の上に正確に足が降りてしまう。常軌を逸しているくせにそういうところだけ当たり前の仕組みになっているようだ。

## 雪原にて

---

気がつくとき雪原のなかでリゾットを食べていた。マッシュルームが入っていてチーズとルッコラが沢山のっているやつだ。寒かったのでスープも飲みたかったが、雪原なのでボーイもコックもいなかった。どうしてこんなことになったのだろうとしばらく思案したがどうにも思い出せない。何も無い雪原で目の前のリゾットを食べながら、夜になる前に何処かに辿り着かないといけない、ということはわかった。少し先で鶴が飛び立つ。その巨体を見送りながらぼつねんと座る私はすすむべき方角について考えた。

あなたが帰ってくる前に、火を焚いて、かめに水を満たし、ふくろうにアイロンをかける。薄く味をつけた茄子の蒸しものにオクラとかつおぶしを和え、椎茸の雑炊に卵を溶きいれて梅肉を散らす。香りが散りはじめると私は冷蔵庫へと戻る。暗闇のなかで、ほどよく冷えた小松菜にくるまり耳を澄ます。炭酸水の瓶の内肌から気泡が一つ離れ、静かに浮いていく。



